

【旧約聖書日課】ハバクク書 2章1～4節

- 1 わたしは歩哨の部署につき  
砦の上に立って見張り  
神がわたしに何を語り  
わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。
- 2 主はわたしに答えて、言われた。  
「幻を書き記せ。  
走りながらでも読めるように  
板の上にはっきりと記せ。」
- 3 定められた時のために  
もうひとつの幻があるからだ。  
それは終わりの時に向かって急ぐ。  
人を欺くことはない。  
たとえ、遅くなっても、待っておれ。  
それは必ず来る、遅れることはない。
- 4 見よ、高慢な者を。  
彼の心は正しくありえない。  
しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 2章22～29節

<sup>22</sup>偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。<sup>23</sup>御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。御子を公に言い表す者は、御父にも結ばれています。<sup>24</sup>初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にいつもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にいつもいるでしょう。<sup>25</sup>これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。<sup>26</sup>以上、あなたがたを惑わせようとしている者たちについて書いてきました。<sup>27</sup>しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教える必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。

<sup>28</sup>さて、子たちよ、御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子の現れるとき、確信を持つことができ、御子が来られるとき、御前で恥じ入るようなことはありません。<sup>29</sup>あなたがたは、御子が正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずです。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 3章22～36節

<sup>22</sup>その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行き、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。<sup>23</sup>他方、ヨハネは、サリムの近くのアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであったからである。人々は来て、洗礼を受けていた。<sup>24</sup>ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。<sup>25</sup>ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。<sup>26</sup>彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながその人の方へ行っています。」<sup>27</sup>ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。<sup>28</sup>わたしは、『自分はメシアではない』と言い、『自分はあの方の前に遣わされた者だ』と言ったが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。<sup>29</sup>花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の音が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。<sup>30</sup>あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

<sup>31</sup>「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。<sup>32</sup>この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。<sup>33</sup>その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。<sup>34</sup>神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が“霊”を限りなくお与えになるからである。<sup>35</sup>御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。<sup>36</sup>御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」

### 「花」を飾ろう【こども説教のために】

「こどもの日・花の日」(6月第2日曜日)には礼拝堂に飾る花をお持ちくださいと、教会の皆さんにお知らせしてきました。子どもたちには、花のことは特に触れずに、この日の礼拝が特別なときであると案内しました。花を持ってくることよりも、ここに来てくれることを大切にしたいと考えたからです。子どもたち一人ひとりの存在自体が、花のようなものだからです。

花にも、いろいろなものがあります。大きい花、小さい花。鮮やかな色の花、目立たない色の花。香り立つ花、そうでない花。春咲く花、夏咲く花、秋咲く花、冬咲く花。その一つひとつが、神のお造りくださったもの、神が装わせてくださった美しさそのものです。

主イエスは、「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」(マタイ6:28)とお教えてくださいました。野の花も、神は美しく咲かせてくださるのです。その存在に気づいたとき、何か大切なものを思い出させられます。

本当は、子どもたちだけでなく、すべて一人ひとりの存在が、神の美しく咲かせてくださる花のようなものなのです。神が花のように美しく装わせてくださっている一人ひとりなのです。美しく咲き始めようとしている子どもたちの姿は、わたしたち皆が神に美しく装われた者たちであることを思い出させてくれるのです。

## 幻を書き記せ

教会の営む子どもたちのためのプログラムを、かつては「日曜学校」と呼び、また「教会学校」と呼んでいましたが、近年は多くの教会で「こどもの教会」などと呼ぶようになりました。18世紀の英国で、学校に行くことのできない子どもたちのために「読み書き、そろばん」を教えるために日曜日の教会で開かれた学校から始まった「日曜学校」は、その後、「聖書」や「信仰問答」を教える「教会学校」となり、今は、何よりも「教会」というキリストに結ばれた者たちの交わりの一員として一人ひとりをおぼえるための「こどもの教会」となったのです。

それは、教会が大切なことを取り戻してきた歴史でもあるのでしょうか。

主イエスに触れていただこうと人々が子どもたちを連れて来たとき、弟子たちはその人々を叱ったのです。彼らは、主イエスの教えを聞こうとして集まっていた者たちにとって、話しをじっと聞いていられない子どもたちは、邪魔者にしか思えなかったのかもしれませんが。大人と同じように座って話を聞いていられるならまだしも、おしゃべりしたり、隣にちょっかいを出したり、キョロキョロと周りを見回したり、遊び始めたり、歩き出したり、泣き出したりするようなことは、我慢ならなかったのでしょうか。それが「子どもらしさ」だとしても、大人の中に加わらせるのならば、きちんと躰けるべきだと、わたしたちだって考えることがあります。けれども、主イエスは、そのように考え、親たちを叱った弟子たちのことを見て憤られ、そして言われたのです、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」（マルコ 10:14）と。

この主イエスの御言葉を、わたしたちは、しっかりと書き留めたいのです。心に書き留めていることが難しいのならば、いつでも思い出せるように、大きく色紙か模造紙にでも書き記して、**走りながらでも読めるように**しておきたいのです。この御言葉は、確かに、主イエスが示してくださった、わたしたちに与えられた、**もうひとつの幻**に違いないからです。

それはまた、この御言葉を子どもたちにも受け渡していくということに他なりません。子どもたちの心にも、この御言葉を書き記させるのです。この御言葉をはじめとする、わたしたちが抱くべき幻、ヴィジョンが示された御言葉を、わたしたちは、後から来た者たちが走りながらでも読めるほどにはっきりと示して見せたいのです。

わたしたちは皆、かつて、先達からそのように示された御言葉を、そこに示される幻、ヴィジョンを、心に書き記してきたのです。それが本当に大切なことであると気づくまでには、時間がかかったかもしれません。それでも、心に書き記されることがなければ、今のわたしたちは無かったことでしょう。

## 初めから聞いていたこと

今日の使徒書は言います、「**初めから聞いていたことを、心にとどめなさい**」と。「**初めから聞いていたことが、あなたがたの内にもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にもいるでしょう**」と。

わたしたちは、御父である神の御前に進み出て、礼拝にあずかることを大切にしています。神の御前に立つ者でありたいのです。神と共に生きる者でありたいのです。その道を確認に示してくださったお方として、主イエスにお頼りしています。主イエスが、御父である神の御子であると信じて、お頼りしています。御子である主イエスと共にあり、主イエスと結びついていることで、御父である神とも共にいることができ、神の御前に立ち続けることもできると、信じているからです。

確かに、主イエスはわたしたちが信じるに足るお方なのです。そのような言い方は、おこがましいことかもしれません。それでも、わたしたちは、主イエスが信頼できるからこそ、信じているのです。このお方が、他にもない神を御父として心から信頼し、信じていらっしゃったからです。

主イエスは、いつも繰り返されていました。ご自分の語る言葉は、御父のお語りになることである、と。ご自分の行うことは、御父が為されることである、と。それを、ある人たちは、このお方が自らを神とする態度だと、非難しました。一步間違えば、そうなったかもしれません。弟子たちも、ずっと半信半疑でした。それでも、彼らは、最終的に心から信じるようになりました。主イエスが死なれたからです。御父のお語りになることだと言って語り続けられた言葉のとおり、主イエスは十字架で死なれるまで、振舞われました。「**わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」(ヨハネ 13:34、同 15:12)と最後に繰り返し教えられた主イエスは、「**友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない**」(同 15:13)と、御父がお示しくださる愛を教え、自ら十字架につけられる道を受け入れて、そのことを行って見せてくださったのです。

弟子たちは、この主イエスと結ばれるしるしとして、洗礼を受けてきました。わたしたちも、主イエスと結ばれるしるしとして、洗礼を受けてきました。主イエスが、御父である神から油注がれた者として、御父の御言葉を心に留め、御父の御業に倣って生きられたように、わたしたちも生きるためです。主イエスが御子として御父から「**聞いていたこと**」を、わたしたちも、「**初めから聞いていた**」のです。わたしたちの心を定め、思いを定め、考えを定め、振る舞いを定める言葉を、わたしたちは、主イエスから与えられています。主イエスを通して、御父である神から与えられています。それは、わたしたちに与えられた、新しい、**もう一つの幻**なのです。